

## 公爵夫人と宝石商

(『幽霊屋敷』から)

A Translation of Virginia Woolf's "The Duchess and the Jeweller" from *The Haunted House* (1945)\*

坂本正雄 訳

translated by Sakamoto Masao

2007年10月3日受理

オリバー・ベーコンはグリーンパークを望むアパートに住んでいた。最上階全部だ。椅子は絶妙な角度でその存在を主張していた。革張りだ。ソファがいくつもの張り出し窓を満たしていた。タペストリー張りだ。幅広の窓が三つあって、薄い編み目カーテンと絵柄の施されたサテンがかかっていた。マホガニーのサイドボードには立派なブランデー、ウィスキー、そしてリキュールがいっぱいだった。真ん中の窓からはピカデリーの細い道に押し合いへし合いしているのはやりの車が屋根をキラキラさせているのを眺めることができた。これ以上の中心地はないと、オリバーは思った。朝八時には朝食を取った。召使いが盆にのせて運んでくる。それから真っ赤な部屋着を広げ、とがった長い爪の先で手紙を開ける。そして厚手の白い招待状を引き出す。公爵夫人、伯爵夫人、子爵夫人、ご令嬢方からだ。招待状には厚く彫刻細工が施してある。オリバーは顔を洗い、トーストを食べ、電熱炉が明るく燃える明かりで新聞を読む。

「オリバー、見るんだ。」オリバーは自分にこう呼びかける。「汚い路地で育ったおまえ、おまえが…。」そうしてオリバーは自分の足もとを見る。申し分ないズボンをはいて、かっこうよく見える。それから靴を、それからゲートルを。みんなかっこうがいい。輝いている。サヴィル・ロウの一流店のはさみから生み出されたカットだ。でもオリバーはよくこうした飾りをふりほどき、暗い路地の少年に戻ることもある。あのこと、ホワイトチャペルのご婦人方に盗犬を売りつけるといったことが、自分の高邁なる野望と思ったこともあった。そしてたたきめされたこともあった。母は言った。「オリバー、ああ、オリバー、いつになったら、分別がつくの。」それから店員だったこともあった。安物の時計を売った。札入れをアムステルダムに運んだこともあった。今のオリバーは、若い頃のオリバーを思い出し、その記憶に忍び笑いを漏らした。そうだ、あのダイヤを三個、うまいことやったんだ。エメラルドを全部任された。その後、ハットン・ガーデンにある店の奥の事務室に入った。天秤がいくつかと、金庫、分厚い拡大鏡が置いてある部屋だった。それから…、それから…。オリバーはほくそ笑んだ。暑

い夜、宝石商たちの群れの間を通ると、値段のこと、<sup>きんざん</sup>金山、ダイヤモンド、南アフリカの情勢を話していたが、なかのひとりが鼻の横に指を当てて、オリバーの通りしなに、「ふーん、ん、ん」とささやいたものだ。単なるささやきに過ぎなかった。肩をぼんと叩くようなものだった。鼻に置いた指。暑い午後、ハットン・ガーデンに集まった宝石商たちの間を飛び交う噂だ。もうずいぶん昔のことだ。それでもオリバーは、それが、肩に置いた手が、それから「ほらあいつを見てみるよ、オリバーだぜ、宝石商だ、あんなに若いのに。」といったささやきが自分の背筋を心地よく過ぎるのを感じた。あの頃は若かった。それから服装がだんだん立派になって、二人乗りの馬車、それから車。初めて劇場の二階正面席に座った。それから一階正面の特別席だ。リッチモンドに別荘を建てた。バラ棚をいくつもあしらひ、川に面していた。若いフランス娘が毎朝一輪摘んで、オリバーのスーツに差ししてくれた。

「そうだ。」オリバー・ベーコンは言った。立ち上がり、両足を伸ばし、「そうだ。」と言った。

そうしてオリバーはマントルピースの上にかかった老婦人の絵の前に立ち、両手を挙げた。「約束を守ってきましたよ。」まるで敬意を表すかのように、両手のひらを合わせた。「賭けに勝ったんです。」そのとおりであった。オリバーはイングランドでもっとも裕福な宝石商だった。でもその鼻、象の鼻のように、長くて柔らかいその鼻は、鼻孔のところが微妙に震え(鼻孔だけでなく、全体が震えているようにも見えた)、まだ満足していないことを、それからちょっと離れた地中に何かのにおいをかぎつけていることを物語っているようだった。トリュフがいっぱい取れる牧草地に離されたでかい豚のことを考えてみて。こちらのトリュフを掘り出したあともまだ、もっと向こうにあるもっと黒くて、大きなトリュフのにおいを、豚はかぎ当てる。そんなふうには、オリバーはメイフェアの豊穡な地中からもう一つのトリュフ、もっと大きくて黒いトリュフをかぎ当てていた。

さてさて、オリバーはネクタイに付けた真珠のピンを直し、粋な青のコートに身を包み、黄色の手袋と杖を手に取り、身体を揺らしながら、階段を下り、その

長くて鋭い鼻を半ばひくひくさせ、半ばため息をつきながら、ピカデリー通りに出た。だってオリバーは寂しい男、満足しない男、賭けに勝っても、手に入らないものを探している男じゃなかったかな。

オリバーは歩くとき少し揺れた。動物園のアスファルト道を、雑貨商やその妻たちを乗せて、ラクダが歩くときと同じだ。雑貨商たちは、手にした紙袋からものを食べ、銀紙をくしゃくしゃにして道に投げつける。ラクダは雑貨商を見下している。ラクダは自分の運命に満足していない。ラクダは青い湖それからその前に生えている椰子の木を見ている。そんなふうには大宝石商、世界で一番の宝石商はピカデリー通りを揺れながら歩いていった。手袋をはめ、それから杖を持ち、見事な着こなし。でもそれでも、まだ不満なのだ。そうするうちに薄暗い小さな店に着く。フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、果てはアメリカまでもその店は名が知られている。ボンズストリートからひとつ通りを隔てたその小さな薄暗い店。

いつもどおり、オリバーは何も言わずに、四人の男の前を通り抜けた。マーシャルとスペンサーのふたりの老人、ハモンドとウィックスというふたりの若者は背筋を伸ばし、羨望の目で、オリバーを見た。琥珀色の手袋をした指の一本を動かすが、四人の男へのあいさつ代わりだ。それから店の奥に進み、自分のオフィスのドアを後ろ手に閉めた。

窓の格子の鍵を開けた。ボンズストリートのざわめきが入ってきた。遠くの通りを走る車の音も聞こえてきた。店の奥の、いくつもの反射鏡の光が天井を照らした。一本の木が六枚の緑の葉を揺らした。だって六月だから。でもフランス娘は土地の醸造所のペダー氏に嫁いだ。もうだれもバラの花を差してはくれない。

「そうだな。」オリバーは半ばため息を、半ば鼻を鳴らした。「そうだな。」

それから壁に仕掛けられたバネに触れた。ゆっくりと羽目板が開き、鋼鉄製の金庫が五つ、いや六つ現れた。みな磨き上げられた鋼鉄だ。鍵を回し、ひとつを開けた。それからもう一つ。それぞれ深紅色のピロードで縁取りがしてあった。それぞれ中に宝石があった。プレスレット、ネックレス、指輪、ティアラ、デューカルコロネット。ガラス箱に入った細工前の石もあった。ルビー、エメラルド、真珠、ダイヤモンド。それぞれが石の輝きを放っていた。

真珠を見ながら、オリバーは言った。「涙だ。」

ルビーを見て、言った。「心臓の血だ。」

「火薬だ。」ダイヤモンドをからから言わせて、言った。ダイヤはきらめき、光った。

「メイフェアを吹っ飛ばすに足りる火薬だ。空高く、ずっと上まで。」言いながら、オリバーは胸を反らし、馬のいななきのような声を上げた。

テーブルの上で、電話が、くぐもった卑屈な音を立

てた。オリバーは金庫を閉めた。

「十分後だ。その前はだめだ。」オリバーは机に座り、カフスポタンに彫られたローマ皇帝の顔を見た。それからまた武装を解いて、日曜日ともなれば盗犬を売っているような路地でビー玉遊びをしている少年に戻った。ずるくて、抜け目のない少年になった。唇が濡れて、サクランボウみたいだ。売り物の牛の内臓に指を浸した。魚を揚げているフライパンに指を突っ込んだ。人混みの中をひょいひょいと駆け抜けた。細身で、敏捷で、宝石を舐めたような目をしていて。そしてほら、ほら、時計の針がこちこち動き、一、二、三、四…。ラムバーン公爵夫人がオリバーの都合がつくのを待っていた。何百人もの伯爵の子孫だ。カウンターで十分は待たせられた。オリバーの都合を待っていた。オリバーの準備が整うまで待っていた。シャグリーン革のケースに入った時計を見た。針は動いていた。こちこち鳴るたびに時計はフォアグラのパテ、シャンペン、ブランデーをもう一杯、一ギニーもする葉巻を、オリバーに渡してくれる。そんなふうには思われた。十分が過ぎたとき、時計がそれらを横のテーブルの上に広げてくれた。それから柔らかい足音が近づいてくるのが、衣擦れの音も廊下に聞こえてきた。ドアが開いた。ハモンドが壁に張り付き、ドアを開けた。

「お越しです。」ハモンドが告げた。

ハモンドはそこに待っていた。壁に張り付いていた。

それからオリバーは立ち上がり、通路をやってくる。公爵夫人の衣擦れの音を聞いた。そうして夫人は現れた。ドア一杯に、香り、威光、傲慢、華麗さ、すべての公爵やその夫人の誇りがひとつの波となって、部屋を満たした。波が砕けるように、腰を下ろすときに夫人も砕けた。広がりくだけ、宝石商オリバー・ペーコンの上に落ちてきた。きらめく明るい色、緑、バラ色、すみれ色で、それから香り、きらめきでオリバーを覆い尽くした。指の先から光を発し、頭の羽根飾りを揺らし、絹地の服から光が出ていた。だって夫人は大柄で、肥えていて、ピンクのタフエタ織りをきつくまとって、それにもう盛りを過ぎていましたから。ひだ飾りのついた傘がそのひだを閉じ、きれいな羽のグジャクが羽をたたむように、革の肘掛け椅子に座ると、夫人も小さくなり閉じてしまった。

「おはよう、ブラウン。」夫人が言った。手をさしのべた。それは白い手袋の隙間から出てきた。オリバーは腰をかがめ、手を取った。ふたりの手が触れたとき、ふたりの間にもう一度つながりが作られた。ふたりは友人だ、敵でもあるが。オリバーが主人、夫人は女主人だ。互いにだまし合っている。互いを必要としている。互いをおそれている。白い光が外を満たし、木が六枚の葉を付け、通りの音が遠くにそして金庫の背後に聞こえるとき、裏の小さな部屋でこうして手を触れあうたびに、これを感じ、あれを知るのだ。

「それで、今日は、今日は何をご所望で。」オリバーは優しく言った。

夫人は心を開いた。自分の心を開いた。大きく開いた。ため息をひとつつき、ことばは発せず、バッグの中から、柔皮のポーチを取り出した。やせたイタチのよう。そのイタチの腹の隙間から、真珠をこぼした。十個の真珠。イタチの腹の隙間から転がり落ちた。一、二、三、四…。天上の鳥の卵か何かのよう。

「もう残っているのはこれだけなの、ベーコン。」夫人は哀しげな声を上げた。五、六、七。真珠は転がり出た。夫人の膝の間の大きな山側の坂を、狭い谷にまで、転がり落ちた。八個目、九個目、十個目。タフエタ地の上、きらめく桃の花のなかに収まった。十個の真珠だ。

「アップルビーの帯から取ったものなの。最後の、最後のものよ。」夫人はうめいた。

オリバーは手を伸ばし、親指と人差し指でその一個を取った。丸く、輝いていた。でも本物だろうか、偽物だろうか。また嘘をついているのだろうか、こりもせずに。

夫人はふっくら丸い指を唇に当てた。「もし夫が知ったら…。」夫人は小声で言った。「ねえ、ベーコン、ちょっとした不運なのよ。」

また賭け事だろうか。

「あの悪党、あのいかさま師。」夫人は息を吐いた。

ほお骨の薄いやつのことだろうか。悪いやつだ。公爵は火かき棒みたいに厳格な人だからな。ほおひげを生やしている。俺の知っていることをもし知ることになれば、夫人を離縁し、幽閉でもしかねない。オリバーは思った。それから金庫を見た。

「アラミンタ、ダフネ、ダイアナ。」夫人はうめいた。

「あの子たちのためなのよ。」

アラミンタ、ダフネ、ダイアナは夫人の娘だった。オリバーは知っていた。崇拜もしていた。でも愛しているのはダイアナだった。

「あなた、わたしの秘密をみんな知っているでしょう。」夫人はオリバーをにらんだ。涙が流れた。涙が落ちた。涙。ダイヤモンドみたいだ。桜の花の色をした夫人のほほのくぼみで、白粉を集めていた。

「長いつきあいでしょう。長いつきあいでしょう。」

夫人は小声で言った。

「長いつきあいです、長いつきあいです。」ことばを舐めるようにオリバーは繰り返した。

「いかほど。」オリバーは尋ねた。

夫人は真珠を手で隠した。

「二万ポンド。」夫人は言った。

でも本物だろうか、偽物だろうか。この、手に取った一粒は。アップルビーの帯と言ったが、もう手放したんじゃないなかったっけ。スペンサーかハモンドを呼ばなくては。「持って行って、調べてこい。」そう言おう。

オリバーはベルに手を伸ばした。

「明日は来てくれるわね。」夫人はせっついていた。邪魔していた。「首相、それから国王もよ…。」夫人はことばを止めて、「それからダイアナも来るわ。」と付け加えた。

オリバーはベルから手を離れた。

オリバーは夫人の背後を見た。ボンドストリートの家並みが見えた。でも見えたのはボンドストリートの家ではなく、さざ波の立った川だった。遡上する鱒。それから鮭。それから首相、そして白いチョッキ姿の自分自身。それからダイアナだった。手の中の真珠を見た。でも、川の光に当て、それともダイアナの目の光に当て、どうやって調べられるだろう。でも夫人の目はぴったりオリバーに注がれていた。

「二万ポンドよ。わたしの負け分。」夫人はうめいた。

ダイアナの母親の名誉のため。オリバーは小切手帳を出した。ペンを取った。

「二万…」と書いた。それから書くのをやめた。絵の中の老婦人の目が自分に注がれていた。お袋だ。

「オリバー。」母は警告していた。「賢くなりなさい。バカなことをするんじゃないよ。」

「オリバー。」夫人は懇願した。「ベーコン」ではなく、「オリバー」に変わっていた。「週末を楽しみに、来るでしょう。」

ダイアナとふたりきりで森の中で。ダイアナとふたりきりで森の中を馬で駆ける。

「ポンド。」とオリバーは書いて、署名した。

「どうぞ。」オリバーは言った。

夫人が椅子を立つと、そこで傘のひだが開いた。クジャクの羽も、波の光も、アジャングールの剣も槍も。そうしてふたりの老人とふたりの若者、スペンサーとマーシャル、ウィックスとハモンドはカウンターの向こうで、オリバーが夫人を先導して、店のドアの所まで見送ると、羨望のまなざしで、身体を硬直させた。オリバーは黄色の手袋を彼らの面前で振った。夫人は体面を保ったわけだ。二万ポンドという、オリバーの署名入り小切手をしっかりその手に握ったわけだ。

「偽物だろうか、本物だろうか。」オリバーはオフィスの扉を閉めながら、疑問を口にした。それら、十個の真珠の粒は吸い取り紙に包んで、テーブルの上にあった。オリバーは窓の所へと持って行った。光に当て、レンズ越しに見た。こんなものが、土を掘り返して出てきたトリュフだった。中心が、芯が腐っていた。

「お母さん、許してください。」オリバーはため息をついた。絵の中の夫人の許しを請うように、手を挙げた。それからもう一度オリバーは、日曜日になると盗犬を売っている路地に遊ぶ少年になった。

「だって、」両手のひらを合わせながら、小声で言った。「楽しい週末が来るんだよ。」

\*使用した版は1982年版：Virginia Woolf, *A Triad Panther Book*, 1982.  
*Haunted House and Other Stories*, London: